（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	棚橋　由賀里
論文題目	15–16世紀モロッコのスーフィーによる社会改革 ―タリーカ・ジャズーリーヤを中心に―		

（論文内容の要旨）

本論文は、15–16世紀モロッコにおいて活動したタリーカ・ジャズーリーヤの社会改革について、個々のスーフィーの著作に焦点を当て、その背景・思想・活動を明らかにすることを目指すものである。本論文は、6章から成る本文と序論・結論によって構成されている。

序論は、先行研究において、通常「ジャズーリー教団」と訳されているタリーカ・ジャズーリーヤが、17世紀に書かれた聖者伝の記述をもとに一枚岩の教団組織とみなされ、その系譜に連なる個々のスーフィーの著作が等閑視されてきたことを指摘する。そのうえで、「タリーカ・ジャズーリーヤ」の語を実態概念ではなく分析概念として用い、スーフィーたち自身の著作を分析することの重要性を示す。

第1章は、マリーン朝からサアド朝による統一までの流れを、政治・社会史を中心に追って、時代背景の全体像を提示している。

第2章は、ジャズーリーヤの名祖ジャズーリーに関して、その死後2世紀以上を経て書かれた聖者伝の記述をもとに後代の聖者伝の記述に基づいて、「異端的」で「過激なジハード主義者」と描写されていた人物像の修正を試みる。彼が著した神学書の記述を同時代の神学者の著作と比較することで、実際には当時の北アフリカの多数派に属する穏健な思想と、民衆教育への熱意を持っていたことを明らかにする。

第3章は、タリーカ・ジャズーリーヤの再定義をおこなう。まず、タリーカ・ジャズーリーヤの語を分析概念として用いることを再確認したうえで、比較的同時代に近い16世紀に書かれた聖者伝資料の記述から、誰がタリーカ・ジャズーリーヤのスーフィーと同定できるかを示すとともに、彼らの活動形態が多様であることを示す。

第4章は、タリーカ・ジャズーリーヤのスーフィーのうち、著作と言行がよく残っているジャズーリー（1465年没）、ガズワーニー（1529年没）、ハブティー（1555年没）、ヤルスーティー（1561年没）の著作を分析するとともに、その活動内容と照らし合わせて状況的・思想的背景を探る。スーフィー思想に関しては聖者論・修行論を分析し、それぞれの理想的なスーフィーのあり方を分析する。また当時の社会に対する言及と、彼らの活動内容の分析から、問題意識のありかを明らかにする。知識のないスーフィーが民衆を誑かすのを批判して正しいスーフィーの育成を試みる例、モロッコ社会の混乱の原因をエリート層の怠慢と悪徳に帰して批判する例、民衆に基本的なイスラームの教育を施し風紀の改善を図る例、戦乱や飢饉で荒廃した農地を再生させる例など、彼らの関心と取り組みの多様性を示す。

第5章は、第4章で分析した個々のスーフィーの活動を内容ごとに比較する。スー

フィーおよび民衆への教育活動、政治との距離感、食料の供給を中心とした社会活動といったトピックに基づいて検討を行う。それにより、スーフィーの問題意識および活動内容、スタンスといったものはさまざまであり、これまでタリーカ・ジャズーリーヤ全体を上げて取り組まれていたと考えられてきた社会改革運動は、実際にはせいぜい数人のスーフィーだけが取り組んでいたものであったことを示す。

第6章は、タリーカ・ジャズーリーヤのスーフィーたちの活動に対する同時代人の応答を分析する。知識人に関しては、協力的な者、批判的な者、はっきりと対立する者などの類型を示す。権力者については、タリーカ・ジャズーリーヤと協力関係にあったサアド朝について、その内部も一枚岩ではないこと、また同一のスルターンに関しても、スーフィーの権威を統治に利用しつつ、自らの人気が脅かされそうになると迫害をおこなうなど、態度が一貫しないことを示す。最後に、先行研究では内部対立に伴う分裂とサアド朝スルターンの迫害によって「分解」したと言われてきたタリーカ・ジャズーリーヤの系譜を検討し、タリーカ・ジャズーリーヤそのものが内部分裂できるほど組織化されていなかったこと、サアド朝スルターンの迫害はジャズーリーヤ全体を標的としたものではなかったことを明らかにする。また、17世紀以降の歴史を描いた史料でタリーカ・ジャズーリーヤに関する記述は姿を消す一方で、ジャズーリーの系譜に連なる個々のスーフィーはモロッコ史において存在感を発揮し続けていることを示す。

結論は、本文での議論を整理したうえで、組織体としての教団・王朝といった先入観から距離を取り、個々のスーフィーの著作を丹念に分析することの意義を主張する。